

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19530174

研究課題名（和文）

社会主義の諸理論とソヴェト体制：思想と政策の相互作用に関する歴史的考察

研究課題名（英文）

Theories of Socialism and the Soviet System: A Historical Consideration on the Interaction between Thoughts and Policies

研究代表者

森岡 真史（MORIOKA MASASHI）

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：50257812

研究代表者の専門分野：経済理論，経済思想

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：集産主義，シェフレ，ルロワ-ポーリュウ，ポーレ，ブルツクス，経済計算論争，生存権

### 1. 研究計画の概要

社会主義をめぐる思想と体制の関係は，一般に考えられているよりもはるかに複雑で，かつ双方向的なものがあった。本研究では，政治経済学における社会主義および社会主義批判の諸潮流と，旧ソ連の社会主義体制の関係について，前者が後者の形成・展開過程で果たした役割と，後者の存在が前者の発展に及ぼした影響の両面から，その複雑な相互作用を考察する。具体的には，1. ソ連誕生以前の社会主義の諸潮流と社会主義批判の状況。2. ソ連社会主義の確立過程における設計と試行錯誤の絡み合いの解剖。3. ソ連の現存に伴う社会主義思想の変化と資本主義認識の深化の3点にそくして明らかにする。

### 2. 研究の進捗状況

これまでの研究を通じて，次の点を明らかにしてきた。

1. ロシア革命以前においては，社会主義の諸潮流のなかで，生存の権利という思想が中心的な役割を占めており，とりわけロシアでは，生存権を土地の耕作と結びつけ，耕作者の間での土地の均分を掲げるナロードニキ的社会主義が大きな影響力を有していた。

2. マルクス主義は，全国民経済規模での生存の保証のためには，生産手段の私的所有と自由市場からなる資本主義に代えて，国家による生産手段の直接的管理を実現することが必要であると主張することによって，生

存権の保証を生産手段の私的所有と市場の廃絶と結びつけた。

3. マルクス主義的社会主義の構想に対しては，1870-80年代というきわめて早い時期に，シェフレやルロワ-ポーリュウによって，その後の議論を多くの点で予見するきわめて先駆的で鋭利な批判が行われていた。

4. ロシア革命直後の時期においては，ミーゼスやブルツクスによる批判と並んで，ポーレによっても独自の意義をもつ社会主義批判が展開されている。

5. ロシア革命後のソヴェト体制の確立過程では，内戦に至る激しい政治闘争のなかで，万人の普遍的な生存権という思想は後退し，逆に，生存権の範囲を「勤労被搾取人民」に限定し，「搾取階級」の生存権を否定する傾向が強まっていった。

6. ネップの終焉以降，生産手段の国家管理は，生存を保証する手段としてよりも急速な重化学工業化を達成する手段として重視されるようになり，「五カ年計画」の実施を通じて，社会主義は生産手段の国家管理それ自体と同一視されるようになり，そのようなものとして最大の影響力を獲得した。

7. しかし，生存の社会的保証という理念と，生産手段の国家管理の結びつきは必然的なものではなく，市場や私的所有の枠組みの内部でも，その部分的な制限を通じて，生存権の実現や生存権の内容の豊富化をはかることは可能であり，その意味で社会主義の理念にはまだ可能性が残されている。

### 3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)本研究を通じて、社会主義思想のなかに、ユートピア社会主義とマルクス主義の対比にとどまらない多様な潮流があること、またそれらは外見上の多様性にもかかわらず、個人の生存の社会的保証という理念が占める位置やそれを実現するための手段をどのようなものかと考えるかという点によって対比可能であることが明確となってきた。マルクスの登場とロシア革命以降、生産手段の社会化と計画経済の樹立という制度的変革と一体化してきたことが論理的必然ではなく、一つの歴史的過程の帰結であるという認識が得られたことによって、社会主義の歴史と(残された)可能性を、従来とは異なる視点から回顧し展望する手がかりが得られたと考えている。

### 4. 今後の研究の推進方策

社会主義思想の歴史的変容については研究成果の項目に記した通りであるが、ロシア革命以後の社会主義の歴史において、普遍的生存権の理念から、搾取者の生存権を否定する思想への転換がいかに生じ、またそれがさらに重化学工業化の熱狂的追求といかに結びついていったかという問題については、さらに立ち入った考察を行う必要がある。この点については、「働かざる者食うべからず」という古くからの、ある意味で市場原理に適合的な理念と、社会主義の理念や運動はどのような関係にあったかという点の解明が課題となる。またこれとあわせて、社会主義の中心から除外された生存権思想は、非マルクス主義的社会主義や人道主義改良思想を含む種々の思想潮流のなかで新たな位置を獲得していったが(その今日的な表現の一つがベーシック・インカム論である)、その経過や背景についても検討を行いたい。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

森岡真史、「二月革命期におけるブルツクスの土地改革論」、『ロシア・東欧学会年報』、査読有、第36号、200年、159-172

森岡真史、「社会主義とソヴェト経済ブルツクス晩年の思索」、『立命館国際研究』、査読無、第20巻3号、2008年、197-224

森岡真史、「経済体制論争の開幕 シェフレとルロワ-ポーリュー」、『立命館国際研究』、査読無、第21巻第3号、2009年、269-299.

森岡真史、「ポーレの比較経済体制論」、『立命館国際研究』、査読無、第22巻第3号、2010年、219-244

[学会発表](計2件)

森岡真史、「置塩経済学の理論と方法」、経済理論学会全国大会、2009年11月22日、東京大学

[図書](計0件)

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]